

---

# 共同研究「東アジア先史時代の定住化過程の研究」(2007～2009年度)の経緯と成果

---

小林謙一

## 1. 研究の目的

縄文時代の集落研究は、土器編年研究と並び、日本先史考古学の大きな柱となってきたが、その成果は決して充分とは言えない。高度成長期による大規模開発に伴う広域調査により、集落調査例は膨大なものとなったが、その実体については不明な点が多い。例えば、最も遺跡数が多く集落も多く発見されている東日本縄文中期についてみると、同時存在住居の把握や集落の定住性について議論が続いている。目を転じて縄文時代の始まりである草創期のあり方をみても、洞窟・岩陰遺跡の利用や堅穴住居の出現など、定住化過程の復元に関して興味深い様相を持ちながらも、いまだ本格的な定住化の議論がおこなわれるにいたっておらず、十分な分析が行われているとはいえない。

縄文中期と草創期の居住遺跡（集落と洞窟またはキャンプサイトなどのセツルメント）は、縄文集落研究さらには縄文社会論の上で、重要な研究対象となる。集落構造や居住形態について解明を進め、さらに土器編年や年代測定研究とあわせ検討することで、先史社会研究として大きな成果があげられると考える。将来的な展望としても、縄文時代全般、列島全域・東アジア全体の先史集落に対して、縄文集落遺跡の集成的研究を行っていくことが必要となることが予想され、その際の先行研究として、共有化し得る研究資源を準備する必要があると考え共同研究をおこなった。

## 2. 研究経過

3ケ年にわたる主な活動は以下の通り。

◇ 2007年度

第1回研究会 4月29日（日）・30日（月） 国立歴史民俗博物館

研究代表者による主旨説明と質疑，意見交換，および研究報告

黒尾和久「縄文集落研究の展望と共同研究への要望」

武川夏樹「多摩地域における集落集成研究とその課題（新地平派としてのまとめ）」

瀬瀬 茂「東海地域を例とした南関東以外の地域での縄紋中期集落集成の課題」ほか

第2回研究会 7月16日（月） 国立歴史民俗博物館

大内千年「中期集落集成研究に向けた現状と課題」

櫛原功一「山梨県の縄文中期の炉の変遷」

兵頭 勲「縄文時代草創期の遺跡分布」

栗島義明「縄文草創期隆起線文期研究の現状と課題」ほか

---

第3回研究会 8月18日(土) 福島県楢葉町井出上ノ原遺跡および楢葉町歴史資料館

合田恵美子「栃木県の中期後半の住居分類及び集落集成について」

小林 謙一・大網 信良「井出上ノ原遺跡における調査経過について」ほか

井出上ノ原遺跡調査現地での縄文中期住居・複式炉の検討会

第4回研究会 12月6日(木)・7日(金) 愛媛県久万高原町上黒岩考古館・穴神洞遺跡

上黒岩遺跡・穴神洞遺跡の出土遺物調査, 周辺環境調査を, 共同で行う。

第5回研究会 2008年3月9日(日) 国立歴史民俗博物館

工藤雄一郎「縄文文化起源における自然環境変動との関わり」

兵頭 勲「押型文期における土器様相と遺跡分布」

綿貫 俊一「石器からみた草創期・早期の生業活動」

橋本真紀夫・矢作 健二「洞窟居住の環境史的検討」

春成 秀爾「縄文開始期における精神活動遺物の意義」

合田恵美子「集落集成の検討事項(栃木県)」

中村 哲也「青森県における縄文中期の年代測定研究」

福島 雅儀「福島県における特殊な遺跡の調査事例」

村本 周三「北海道における縄文時代中・後期の平地住居跡」

櫛原 功一「山梨県中久堰遺跡の調査」

・研究会以外の活動(本館および分担者各自の調査作業)

中期における定住集落の展開を明らかにする目的で, 研究者が分担し, 一部補助員を用いて遺跡集成と, 遺跡内空間分析用ソフトによる住居内遺物分布の分析をおこない, 縄文中期における定住活動の内容を検討する基礎データを作成した。2007年度は東京都の遺跡について集成作業をおこなった。

上黒岩遺跡を題材に, 縄文草創期における定住化の度合いを検討するため, 遺跡の層位や遺物など基礎データを作成した。そのため, 共同研究者のほか中橋孝博, 丑野毅, 二宮修治氏など分析の専門家に必要に応じて協力を依頼し, 上黒岩遺跡出土物の調査・分析をおこなった。

◇2008年度

第1回研究会 6月21日(土) 国立歴史民俗博物館

研究分担者・協力者による研究報告

中山 真治 多摩ニュータウンNo.446遺跡の縄文中期中葉の集落の検討

領家 玲美 相模原市における縄文中期集落研究

今福 理恵 山梨県域における縄文集落研究

矢作 健二 縄文草創期の遺跡立地と周辺環境

村本 周三 北海道における縄文集落調査

合田恵美子 北関東における縄文中期集落集成について

福島 雅儀 会津盆地における縄文前中期遺跡の分布について

津村 宏臣 縄文中期集落の空間分析

---

---

第2回研究会・現地調査 8月24日(日) 相模原市大日野原遺跡

縄文中期集落調査現場における周辺環境調査

第3回研究会 9月11日(木)～14日(日) 北海道斜里町縄文・擦文遺跡調査現地調査

帯広市百年記念館埋蔵文化財センター(大正3遺跡他), 斜里町知床博物館, 斜里町ウトロ遺跡調査現場見学および周辺遺跡の陥没堅穴跡の調査

第4回研究会 2009年2月7日(土) 国立歴史民俗博物館

研究分担者・協力者による研究報告

小林 謙一 縄文草創期の居住施設について

中山 真治 府中市本宿町遺跡について

宇佐美哲也 武蔵野台地東辺の様相

纈纈 茂 集落分析の時間軸・東海の場合

黒尾 和久 縄文中期後半の時間軸再考 南武蔵の加曾利E1・2式編年研究の課題 近接  
同時期住居の時間関係

村本 周三 ウトロ遺跡の調査

櫛原 功一 六角形堅穴の一例

・研究会以外の活動(本館および分担者各自の調査作業)

中期における定住集落の展開を明らかにする目的で, 研究者が分担し, 一部補助員を用いた集落遺跡集成と, 遺跡内空間分析用ソフトによる住居内遺物分布の分析を進め, 縄文中期における定住活動の内容を検討する基礎データを作成した。

昨年度につづき, 縄文草創期における定住化の度合いを検討するため, 上黒岩遺跡の地形や遺物など基礎データを作成した。共同研究者のほか, 丑野毅, 二宮修治氏など分析の専門家に分析を依頼し, 上黒岩遺跡出土物の整理報告書の作成を進めた。

縄文集落調査のため, 千葉県加曾利貝塚博物館, 茨城県真壁町歴史資料館において, 縄文集落出土土器の資料調査をおこなった。また, 東京都中期集落集成担当の分担者打ち合わせなど, 個別の研究打ち合わせを数度おこなった。

◇2009年度

第1回研究会 5月8日(金)～10日(日) 熊本研究会 熊本大学ほか

・5月8日 遺跡巡検

熊本県文化財資料室にて, 資料調査。白鳥平B, 河陽F遺跡の縄文草創期土器・石器の調査。熊本市立熊本博物館見学など。

・5月9日 熊本研究会 熊本大学埋蔵文化財調査室

小林 謙一 「炭素14年代による縄文中期集落の研究」

小畑 弘己(熊本大学) 「縄文時代への生態的アプローチ」

池田 朋生(熊本県立装飾古墳館) 「熊本県における縄文集落研究」

・5月10日 熊本県内の遺跡巡検(御領貝塚, 黒橋遺跡など)

第2回現地研究会 8月10日(月) 神奈川県相模原市大日野原遺跡調査現地

---

---

縄文中期集落遺跡の発掘調査現地において、下記のような個別報告の後、調査中の縄文中期住居の覆土埋没状況や重複関係の検討会および周辺地形観察や石器石材調査をおこなった。

小林 謙一 「大日野原遺跡の調査状況」

河本 雅人（相模原市博物館）「相模原市内の遺跡状況」

橋本真紀夫・矢作 健二 「藤野町の自然・地形環境」

第3回研究会 11月21日（土）・22日（日） 国立歴史民俗博物館

縄文草創期に関する展示「縄文はいつから？」および歴博フォーラムに参加し、その成果を元にした討議をおこなった。特に歴博フォーラムでの発表における、小林謙一「定住化の始まり」、工藤雄一郎「気候変化と文化変化」、橋本真紀夫「地形の変動からみた遺跡立地」は共同研究分担者の発表であり、内容としても本共同研究に深い関わりを持つものであった。また、酒井宗孝（花巻市博物館学芸調査員）「東北地方の縄文草創期の様相」、安藤広道（慶応義塾大学）「関東南西部の縄文時代草創期の様相」の発表も、地域ごとの遺跡分布やあり方からセツルメントシステムに迫る内容を持ち、本共同研究に大きな参考となった。また、2日目は、福島雅儀による弥生古墳時代の時代区分の検討について縄文時代の時代区分と対比しながら議論した後、今後の研究成果のとりまとめについて討議した。最後に、特別展示室において、ギャラリートークをもとに、縄文時代草創期の遺物および遺跡やその分布状況について検討を加えた。

・11月21日午後 歴博フォーラム「縄文はいつから!？」参加

・11月22日研究会 国立歴史民俗博物館

福島 雅儀 「時代区分について」

小林 謙一 「今後の予定・研究報告エントリーについて」

小畑 弘巳（熊本大学）・鈴木 三男（東北大学）・酒井 宗孝（花巻市博物館）「縄文はいつから？」展ギャラリートーク参加および特別展示見学

第4回研究会 2010年3月13日（土） 中央大学文学部（セツルメント研究会研究集会と共同）

研究分担者・協力者による公開研究会をセツルメント研究会「縄文集落研究の新地平の15年」研究集会と共同でおこない、南関東地方の縄文時代中期集落研究および北海道・北関東・中部・東海・瀬戸内地域の個別研究について比較検討した。南関東地方の集落研究は、本共同研究において最も力を入れた部分であるが、特に細かな調査法に基づく集落の一時的景観復元について、研究者多数による議論を行うことができ、改めて集落研究・調査の問題点や議論において齟齬をきたしている点が浮き彫りになるなど、本共同研究をまとめるに当たっての契機を得ることができた。

小林 謙一 「縄文住居調査学史」

中山 真治 「武蔵野台地における縄文中期集落調査の事例から」

黒尾 和久 「多摩における縄文中期集落調査の展望」

瀧 茂 「調査例個別報告その1 東海地方から」

村本 周三 「調査例個別報告その2 北海道での調査実践」

遠部 慎 「調査例個別報告その3 犬島貝塚の調査」

橋原 功一 「調査例個別報告その4 山梨県の調査例」

---

大網 信良 「調査例個別報告その5 井出上ノ原遺跡の調査実践」

武川 夏樹 「調査例個別報告その6 北関東から」

・研究会以外の活動（本館および分担者各自の調査作業）

中期における定住集落の展開を明らかにする目的で、研究者が分担し各地の集落遺跡集成と、遺跡内空間分析による住居内外の遺物分布の分析などを通じた集落群の空間分析をおこない、縄文中期における定住活動の内容を検討する基礎データを作成した。また、北海道キウス(4)遺跡、福島県井出上ノ原遺跡住居跡などの縄文集落形成に関わる試料の年代測定をおこなった。

上黒岩遺跡を題材に、縄文草創期における定住化の度合いを検討するため、遺跡の層位や遺物など基礎データを作成したが、その検討内容を国立歴史民俗博物館研究報告において「愛媛県上黒岩遺跡の研究」として報告した際に、成果として盛り込んでいる。草創期から早期に関しては、人々の移住などによる土器の移動がどのような広がりを持っているのかを検討するために、二宮修治、新免歳靖、坂上恵梨、河西学、神山崇、永嶋正春氏らと共同で栃木県域の早期土器や各地の草創期土器片の蛍光X線分析、鉍物組成の分析など、土器の胎土分析をおこなった。

縄文集落調査のため、千葉県加曾利貝塚博物館(土器製作実験)、花巻市博物館(上ノ台1遺跡)などにおいて、縄文集落出土土器・石器の資料調査をおこなった。また、中期集落集成担当の分担者打ち合わせなど、個別の研究打ち合わせを数度おこなった。

### 3. 研究成果

#### 全期間の研究成果

本共同研究は、縄文時代前半期の居住形態をあきらかにするという目的のもとに、時期的に2つに大きく分かれ研究を進めた。時期ごとに、成果を概略する。

定住化の始まりを追求する縄文時代草創期を対象とした研究では、小林のほか、春成、西本、工藤、綿貫、兵頭、遠部、橋本、矢作のメンバーにより、この共同研究の前段階での個別共同研究「愛媛県上黒岩遺跡の研究」(2004～2006年度、代表春成秀樹)を発展させ、縄文草創期・早期の洞窟居住について、栗島義明氏などに協力を得ながら上黒岩遺跡を中心に現地調査・資料調査を重ね、年代測定研究や丑野毅氏らに協力を仰いだ土器の圧痕研究、神山崇氏、二宮修治氏、河西学氏、新免歳靖氏、坂上恵梨氏らに協力を仰いだ土器胎土分析をおこない、縄文時代初頭の居住活動、セツルメントパターン、生業活動、土器分布の動きを共同研究会によって検討した。成果としては、特に上黒岩遺跡の研究成果では研究報告154集「愛媛県上黒岩遺跡の研究」(春成秀爾・小林謙一編)として報告を刊行したとともに、前述の前共同研究においておこなっていた第58回歴博フォーラム「縄文時代のはじまり—愛媛県上黒岩遺跡の研究—」(2007年1月開催)の記録集として『縄文時代のはじまり—愛媛県上黒岩遺跡の研究—』(小林謙一・国立歴史民俗博物館編、2008年、六一書房)を刊行した。さらに、上黒岩遺跡以外の成果として、小林・工藤らと小畑弘己氏らとの共同研究により東アジアの中での縄文草創期の位置づけを測り、西本・橋本らと鈴木三男氏らの研究により自然環境との関わりを検討、酒井宗孝・安藤広道・宮尾享氏らと日本列島全域にわたる草創期遺跡の資料を集成し、土器・石器の在り方を中心に検討した。その成果を、2009年国立歴史民俗博物館特別展「縄文はいつから!?—1万5千年前に何がおこったのか」(2009年10月14日

～2010年1月24日）において展示し、図録には遺跡ごとの情報を展示資料集成として掲載した。さらに、第72回歴博フォーラム「縄文はいつから!？」の個別報告の中に研究成果を示した。さらに、これらの中に提示し切れていない、石器研究、土器研究、胎土分析による土器の移動の研究などを、本研究報告にまとめた。以上のように、列島全域に渡る広域的な集成研究と、上黒岩遺跡を中心としたケーススタディとがおこなわれ、列島における定住化過程の一面があきらかにされつつあることは大きな成果である。今後も、本共同研究の成果を、さまざまな形で報告していく予定である。

環状集落に代表される定住化の完成された一面を示す縄文中期研究については、小林、黒尾、中山、武川、瀬藤、大内、中村、津村らの他、合田恵美子・宇佐美哲也・村本周三・池田朋生・河本雅人・領家嶺美・大網信良氏らの協力を得ながら、列島各地の集落遺跡集成と、個別研究を進めた。小林による科学研究費補助金基盤Cの年代測定研究とあわせながら2007年度は福島県楢葉町井出上ノ原遺跡、2008・2009年度は神奈川県藤野町（現相模原市）大日野原遺跡の縄文中期集落遺跡の発掘調査をおこない、現地研究会を重ねながら、竪穴住居跡を対象を絞ってその実体解明を進めた。その成果は、『歴博』No.143「特集 縄文時代を測る」（2007年7月）ほか、『縄文研究の新地平（続）集落・住居のリサーチデザイン』（小林謙一編、六一書房、2008年）などに成果を発表してきた。2010年3月の中央大学における公開研究会では、竪穴住居調査方法に関する現状と課題を整理し、今後の研究へとつなげた。また研究課題の一つであった集落遺跡集成については、東京都内の縄文中期集落遺跡集成としてデータベースを完成させ、人間文化研究機構 NihūONE 研究成果統合データベース「縄文集落データベース」「縄文集落文献データベース」として公開した。今後もその内容を補完し、追加情報や正誤の訂正をおこなっていく必要もある。

研究成果は、多くの学術論文として、共同研究者の手で発表されており、縄文時代研究に新たな潮流を示していると評価される場所である（『日本考古学年報』『史学雑誌』などの各年度の学界展望参照）。本共同研究の成果は、本研究報告にまとめるほか、さらに時間をかけてまとめている成果も多く、研究報告通常号やその他の研究誌によって報告していく予定である。

以上のように大きな成果を残しているが、課題も残された。東アジアの中での位置付けにまで迫りきれなかった点である。韓国との共同研究を目指したが、個別的な情報交換に留まった。韓国集落研究会と個別に意見交換し、小林謙一「日本縄文集落遺跡における竪穴住居跡調査研究史と課題」『聚落研究』1（2009年、聚落研究会）として韓国で刊行した成果があるが、逆に海外の研究者の研究成果を日本で紹介したり、韓国等での共同研究会の開催等は整えることができなかった。このほか、上述のように草創期の時期では上黒岩遺跡の研究結果、中期の研究では東京都下にあたる多摩武蔵野地域の研究成果が突出しており、その他の地域の研究もおこなっているものの、本共同研究の範ちゅうでは成果をまとめきれなかった点が反省される。

#### 4. 本報告の構成

本共同研究の研究成果を、本研究報告に時期別に2部に分けて提示する。概略は下記の通りである。

なお、本書では、各執筆者の表記を尊重したので、「縄文」「縄紋」や「上黒岩遺跡」「上黒岩岩

---

陰遺跡」など、異なった表記が混ざることには留意されたい。

#### 1 部 縄文時代草創期における定住化

縄文時代草創期から早期を対象とした、定住化のはじまりを廻る議論として、上黒岩岩陰遺跡の整理作業から提起された課題や、企画展「縄文はいつから？」展に関連した研究テーマとして胎土分析や年代研究、環境復元など、初期定住の実態をあきらかにするための大きな成果が提示された。

<論文>

##### 春成 秀爾 「旧石器時代の女性像と線刻棒」

「上黒岩遺跡の研究」(歴博研究報告 154 集)で示した研究から発展させた論考で、上黒岩遺跡出土石器(線刻礫)・線刻棒の世界史的位置づけを論じた。

##### 工藤雄一郎 「日本列島における土器出現期の較正年代について—IntCal04 と IntCal09 の違いおよび「13,000 年問題」—」

新たに公開された IntCal09 を用いて、縄文時代草創期の較正年代について論じた。

##### 綿貫 俊一 「愛媛県上黒岩遺跡の石器組成の分析」

上黒岩岩陰で具体的にどのような生活が行われ、半定住集落や定住集落が形成されていくなかで上黒岩岩陰の性格とはなにかを詳らかにするために、出土した石器組成と石器石材の組成について分析した。なお、「上黒岩遺跡の研究」(歴博研究報告 154 集)の補足として「愛媛県上黒岩遺跡出土石器 2」を附した。

##### 矢作 健二 「愛媛県上黒岩遺跡における生活空間について—縄文時代草創期・早期の定住化に関連して—」

上黒岩遺跡周辺の地形・地質を含めた環境復元から、初期定住の実態について検討した。

##### 橋本 真紀夫 「縄文時代草創期初期の地形環境 —武蔵野台地神田川周辺遺跡の立地から—」

東京東部における縄文時代草創期の地形変動の復元を試みた。

<活動報告>

##### 小林 謙一 「愛媛県上黒岩遺跡現状測量調査報告」

愛媛県上黒岩遺跡の再整理に関連して、現状測量調査成果の提示をおこなった。

<研究ノート>

##### 遠部 慎・宮田 佳樹・小林 謙一 「東海地方における縄文時代草創期から早期の土器の炭素 14 年代測定」

東海地方伊東市内の縄文時代草創期～早期の炭素 14 年代測定研究と較正年代をまとめた。

<論文>

##### 河西 学 「栃木県出土縄文早期土器の岩石学的手法による胎土分析」

栃木県内の 4 遺跡から出土した縄文早期井草式・夏島式土器を対象として薄片による岩石学的胎土分析をおこない、関東地方河川砂との比較により土器の原料産地推定を試み、当時の土器作りと土器の移動について検討した。

#### 2 部 縄文時代中期における定住の実態

定住化が展開していく段階である縄文時代中期を対象とした研究は、集落データベース作成に関わる研究と、各地の中期集落の実態を探る研究をおこなった。

---

<論文>

中山 真治 「縄文時代中期の集落と廃棄について—南関東の中期前半～後半を中心に—」

縄文時代中期の廃棄について、主として東京多摩地域の中期遺跡での土器の接合関係から読み取れる遺物の廃棄について時期的な特徴と変遷を捉えた。

宇佐見哲也 「武蔵野台地東辺における縄文時代中期の集落景観」

八ヶ谷戸遺跡か弁財天遺跡など武蔵野台地東辺の10集落を例に、土器細別時期ごとに住居分布を検討し、集落の実態を明らかにした。

小林 謙一 「縄紋時代竪穴住居跡埋没過程の研究」

縄紋時代の竪穴住居のライフサイクルのうち、住居廃絶後の廃棄行為の時間・住居跡地埋没の時間の検討をおこなうために、住居出土試料を炭素14年代測定した。埋没にかかる時間にかかなりの差異を認めた。

福島 雅儀 「阿武隈川上流域における縄文時代中期から後期への集落変化—福島県三春町柴原 A 遺跡と越田和遺跡の発掘調査から—」

縄紋中期後葉の大木式文化を中心に特徴的に見られる複式炉を取りあげて、分析した。東北地方に広く分布する複式炉のうち、上原型とされるものは地域的に限定される。平地式敷石住居や集合沈線による在地土器などからも阿武隈川上流域の独自性が指摘された。

<研究ノート>

中村 哲也 「笹ノ沢 (3) 遺跡の集落規模」

縄文時代の定住について語られる際、集落の規模、ひいては集落を構成する人口が一つの重要な要素となっている。集落規模を検討する基礎となるのは人間活動の結果として残された種々の遺構であり、なかでも竪穴住居跡は重要である。ここでは八戸市笹ノ沢 (3) 遺跡を例にとり、定住を検討する際の重要な要素である竪穴住居跡の変遷を検討した。

<活動報告>

小林 謙一 「縄文時代中期集落 (東京都内) データベースについて」

nihuONE「KK01 縄文集落データベース」東京地区の縄紋中期集落集成データベースおよび「KK02 縄文集落文献データベース」について、掲載した。今後集成し追補していくためにそのローデータである時期別の住居軒数について提示した。

なお、下記の研究ノートについては、本共同研究と関連してまとめられたが、都合により、『研究報告』167号において報告するので、あわせて参照されたい。

大内 千年 「房総半島における非在地系土器について—中期後葉の曾利式系土器のあり方—」

縄紋土器研究の主流であった土器編年研究とは違う視点からの土器研究を模索する試みとして、「異系統土器」に対する検討を行なう。房総半島における縄紋時代中期後半における「非在地系土器」の代表として、「曾利式系土器」を取り上げ検討する。

5. 共同研究員 (◎は研究代表者、○は研究副代表者、所属は2010年3月現在)

今福 利恵 山梨県教育庁学術文化財課

大内 千年 千葉県教育振興部

遠部 慎 北海道大学埋蔵文化財調査室

郭 鐘喆 (財) ウリ文化財研究所



---

櫛原 功一	山梨文化財研究所	黒尾 和久	国立ハンセン病資料館
瀨瀬 茂	名古屋市見晴台考古館	◎小林 謙一	中央大学文学部・本館客員准教授
武川 夏樹	栃木県教育委員会	津村 宏臣	同志社大学文化情報学部
中村 哲也	青森県埋蔵文化財センター	中山 真治	府中市教育委員会
橋本真紀夫	パリノ・サーヴェイ株式会社	兵頭 勲	愛媛県教育委員会
綿貫 俊一	大分県教育庁埋蔵文化財センター	矢作 健二	パリノ・サーヴェイ株式会社
西本 豊弘	本館・研究部・教授	○工藤雄一郎	本館・研究部・助教(2009年度)
春成 秀爾	本館・研究部・名誉教授	藤尾慎一郎	本館・研究部・教授
福島 雅儀	元, (財) 福島県文化振興事業団 (2007年度まで)		

(中央大学文学部, 共同研究代表者)